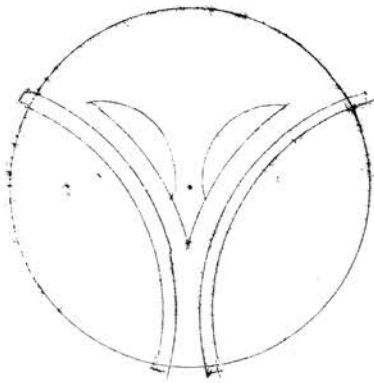


昭和 53 年度

第 13 回 全国 バス 学習 研究 集会



と き 昭和 53 年 10 月 20 日 (金)

と ころ 広島 県 豊 田 郡 豊 町

豊 町 立 豊 小 学 校

研究会要項

1 日程

9:00 9:40 10:25 10:45 11:30

受 付	公 開 授 業 (2年・4-1)	学校放送 テレビ	公 開 授 業 (6-1)
-----	---------------------	-------------	------------------

会場移動

11時50分発 → ^{バ ス} 全体会場 (豊中) へ

全体会場で昼食をおとり下さい。

2 公開授業

教科	学 級	単 元	主要機器	指 導 者	教 室
算数	2	かさじちべ dl単位の理解 1とdlの単位関係	アナライザ C H P	花本 喬二	2-7 視聴覚室
社会	4-1	さまざまな土地 のくらし 島のくらし	VTR O H P	久保 敏胤	4-1
社会	6-2	武士の世の中 2 「農民のくらし」	アナライザ O H P	土井紀美子	視聴覚室

1 研究主題

こどもひとりひとりの能力を開発し学習効果を高める方策を深めて

副題 学習指導の効率化と教育機器の活用

2 作業目標

(1) 教授 = 学習過程に機器をどう組み入れるか。

T V 教材 シート学習 O H P K N プラネタリウム A M 放送
等を組み入れた教授 = 学習過程

(2) 機器導入により学習集団の組織をどう変えていくか。

機器を組み入れることにより教師の役割は どう変わるか。

学習集団の組織化は どう変わるか。

発問 助言は どう変わるか。(行動化)

(3) 学年 教科にもっともかなった教授 = 学習過程・教授 = 学習形態

をどう組織したらよいか。(最適化)

(4) どのようにして学年共同経営の実を上げていったらよいか。

3 研究の方法と計画

(1) 研究の方法

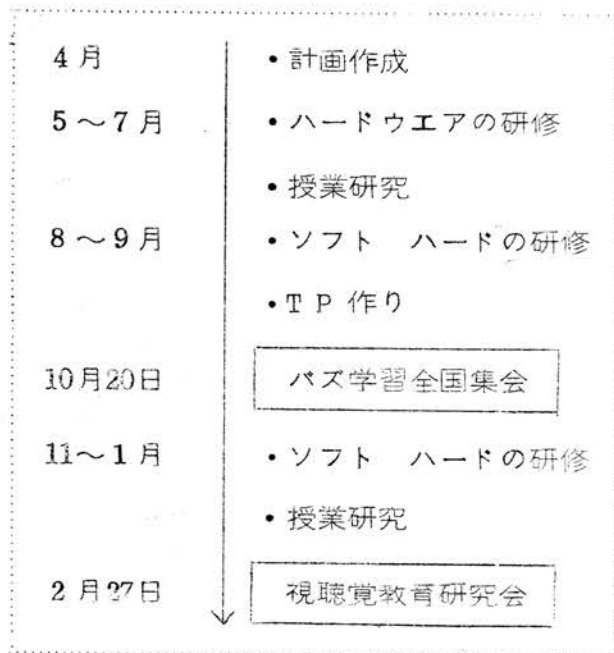
ア 学校課題 (全校)

- 授業研究 (グループ)
- 理論と実践の累積
- 実技 実習 (教育機器)
- 学年部会の相互の研究
- 教科研究部の相互の研究

イ・学年課題（部会）

- 資料（ソフトウェア）の開発
- 機器（ハードウェア）の組み入れ
- ソフト ハードの学習効果の研究
- 機器システムと具体的研究
- 学校課題への提案

（2）研究計画



4 研究の指針

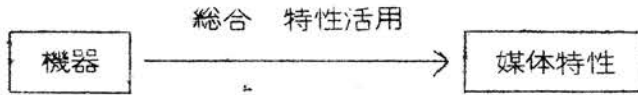
（1）研究コースと個人 学年コース

（2）実践に対する基本的な考え方

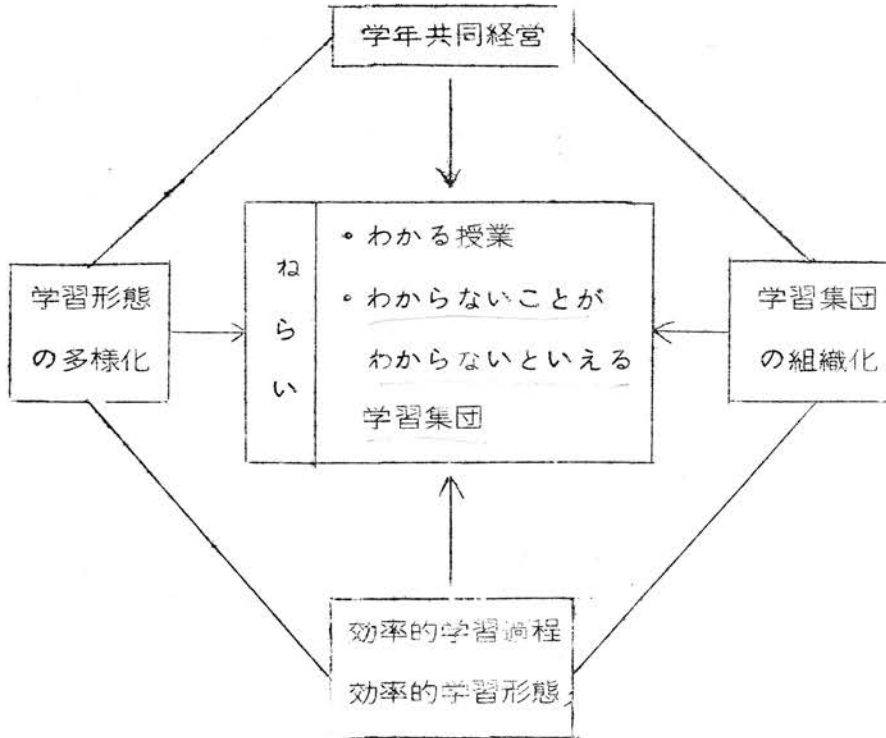
ア 教師の役割

- 提示機能（内容伝達情報提示機能）
 - 制御機能（反応要求情報提示機能）
- 教授と評価
- （発言 動作 ノート点検 テスト分析）

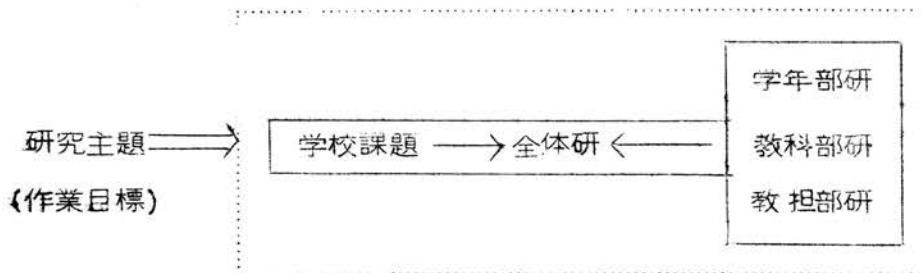
イ 教育機器と最適化 (媒体特性チェックリスト)



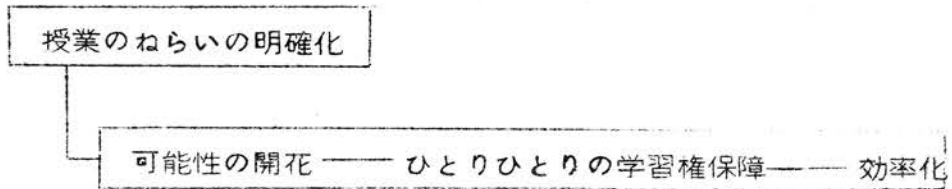
ウ 授業過程の最適化 (理論 実践 総合)



エ 研究方法の焦点化と学年の協業化



オ 教育目標の徹底

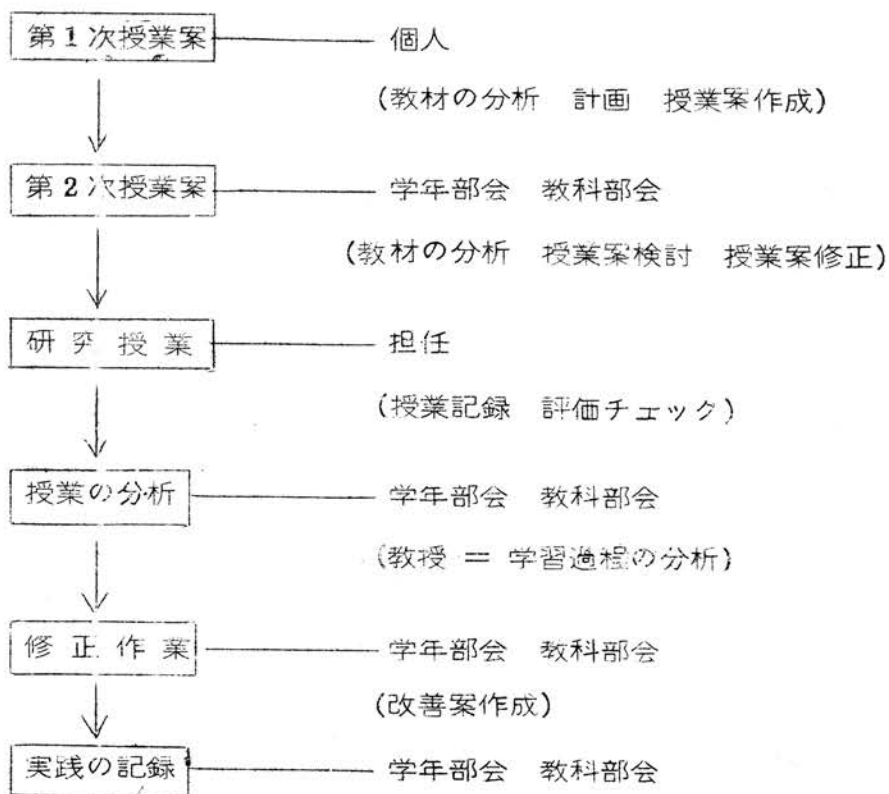


カ 指導の主体

指導の主体は機器ではなく教師

(学習指導を効率化するための機器利用)

キ 記録の積みあげ



5 研究の概要

月	教育工学	技術研修	授業研究
5	基礎工学	A N	31 3-1 算数 4-2 算数
6		1~2 OHP ㊦(2名)	13 3-1 算数 4-2 社会 6-1 理科 21 5-2 理科
7		プラネタリウム	5 3-2 社会
8	3~5 応用工学 ㊦(2名) 8~10 基礎工学 ㊦(2名) 23~25 基礎工学 ㊦(2名)	OHP カメラ プラネタリウム	
9		A'N OHP	14 6-1 社会
10		OHP カメラ	11 複式 算数 20 全国バス学習 研究会
11	9~10 全国放送教育研 (4名) 16~17 広島県小視聴覚 教育研(4名)	~ VTR	15 1-2 理科 6-1 理科 21 5-2 国語 29 5-1 算数 1-1 算数
12		A N ㊦	13 4-1 社会 2 社会
1		A N OHP	
2		OHP	27 視聴覚教育研
火曜日 8:20~8:40 スタジオから学校放送 15:40~16:45 学年部会 水曜日 15:40~16:45 職員研修 木曜日 8:20~8:40 屋内体育館で音楽朝会			備考 ㊦ 教育 センター ㊦ リコー

6 教科担任時間割表

(1) 教科担任教科時数

学級	担任	性別	国	作	習	社	算	理	音	図工	家	体
5-1	A	女					12		4		4	
5-2	B	男				8						12
6-1	C	男					12	8				
6-2	D	女				8			4		4	
専科	E	男						8		8		
教頭	F	男		4								

(2) 自学級担任教科時数

担任	国	社	算	理	音	図工	家	体	道	学活	時数内訳		
											内	外	計
A	6		6		2		2		1	1	13	10	23
D	6	4						3	1	1	15	13	28
C	6		6	4					1	1	18	10	28
D	6	4			2		2		1	1	16	8	24
E												16	16
F												4	4

算 数 科 学 習 指 導 案

指 導 者 花 本 喬 二

- 1 日 時 昭和53年10月20日(金) 9:40 ~ 10:25
- 2 学 年 第2学年 男子14名 女子27名 計41名
- 3 単 元 かさしらべ
- 4 単元の指導観

(1) 第1学年では2つの容器に入る水のかさを直接比較したり コップなどの任意単位で「何はい分」として比較し 測定の素地指導をしてきた。第2学年では これを受けて 普遍単位 dl を用いること ますを用いて測定することに進めるわけである。元來かさの測定は連続量をますで「何はい分」と測りきっていくのだから 時計の読み 長さの測定 などよりも素朴な方法である。それだけに実測を重んじて指導すれば かさの理解も 測定技能も身につけることができる。

(2) かさは3次元の量であるために その量感は一長さの場合よりほかつかみにくい。児童は 実測を通じてしだいに量感を養っていくのであるが 実測を多くすればよいというのではなく 測る前にあらかじめ量を予想して測らせるとか 牛乳びんとかバケツなど身近な入れ物の容量を覚えさせておくなど、くふうして扱いたい。

(3) かさについても加減計算が可能であること(量の加法性)を理解させる。実際に水を使って操作しながら具体的に理解させ、その後抽象的な量計算に進める。ただし 抽象的な計算にうつってからも 水に便利な教室を利用し繰り返し実測をさせて 量の実感をもたせるようにしたい。

5 目 標

(1) 水のかさはますで測ることを知らせ ますを用いて測定できるよ

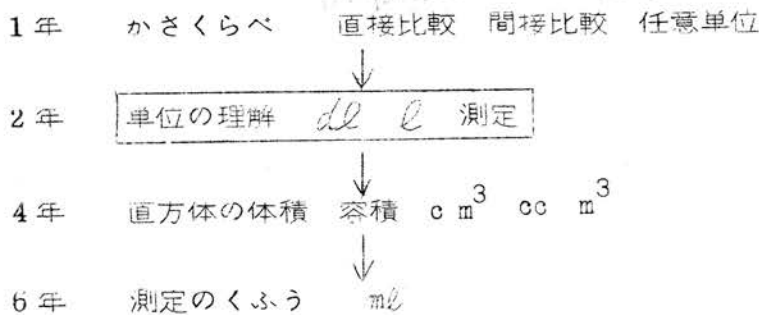
うにするとともに かさの観念および量感を養う。

(2) かさの単位 dl l および単位関係を知らせる。

6 指導計画

- | | | | |
|-----|------------|-------------------------|----------|
| 第1次 | dl 単位の理解 | ますを用いた測定。 | 1時限 (本時) |
| 第2次 | l 単位の理解 | l と dl の単位関係。 | 1時限 |
| 第3次 | 単位換算 | 複名数の表わし方
かさの加減計算。 | 1時限 |
| 第4次 | 加減計算 | 量の大小
かさについての適用などの復習。 | 2時限 |

7 単元の前後関係



8 単元の展開

(1) 本時の主題

かさの単位 dl を知り 測定技能を身につける。

(2) 本時の目標

かさの単位 1デシリットルの量を知らせ 1 dl ますで水のかさを測るようにし 量感を養う。

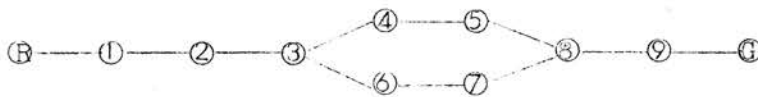
(3) 本時の目標行動

1デシリットルの量を知り 1 dl ますを使って いろいろな容器に入っている水のかさを測ることができる。また 測ったかさが何 dl であったかを記録したり 発表することができる。

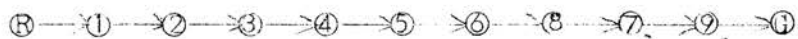
(4) 下位行動目標

- ㉞ 水とうに入っている水のかさを コップ何はい分かで比べることが
ができる。
- ① コップの大きさは色々あるので 紙に書いたり人に知らせたりす
ることができないことを指摘できる。
- ② きめられた共通のますを使うと便利であることが言える。
- ③ 1デシリットル (1dl) ますを指摘できる。
- ④ 1dlを1デシリットルと読むことができる。
- ⑤ dlを正しく書き表わすことができる。
- ⑥ 水を容器にいっぱい入れ それを1dlますにうつしとり 何はい
入っていたかが言える。
- ⑦ 1dlますに3はいあれば「3dl」 8はいあれば「8dl」のよう
に言うことができる。
- ⑧ 実測したかさを 何dlと書き表わすことができる。
- ⑨ 実測をして 端下の場合「5dlとちょっと」「もう少しで5
dl」「5dlぐらい」等ということが言える。

(5) 下位目標の相互関係図



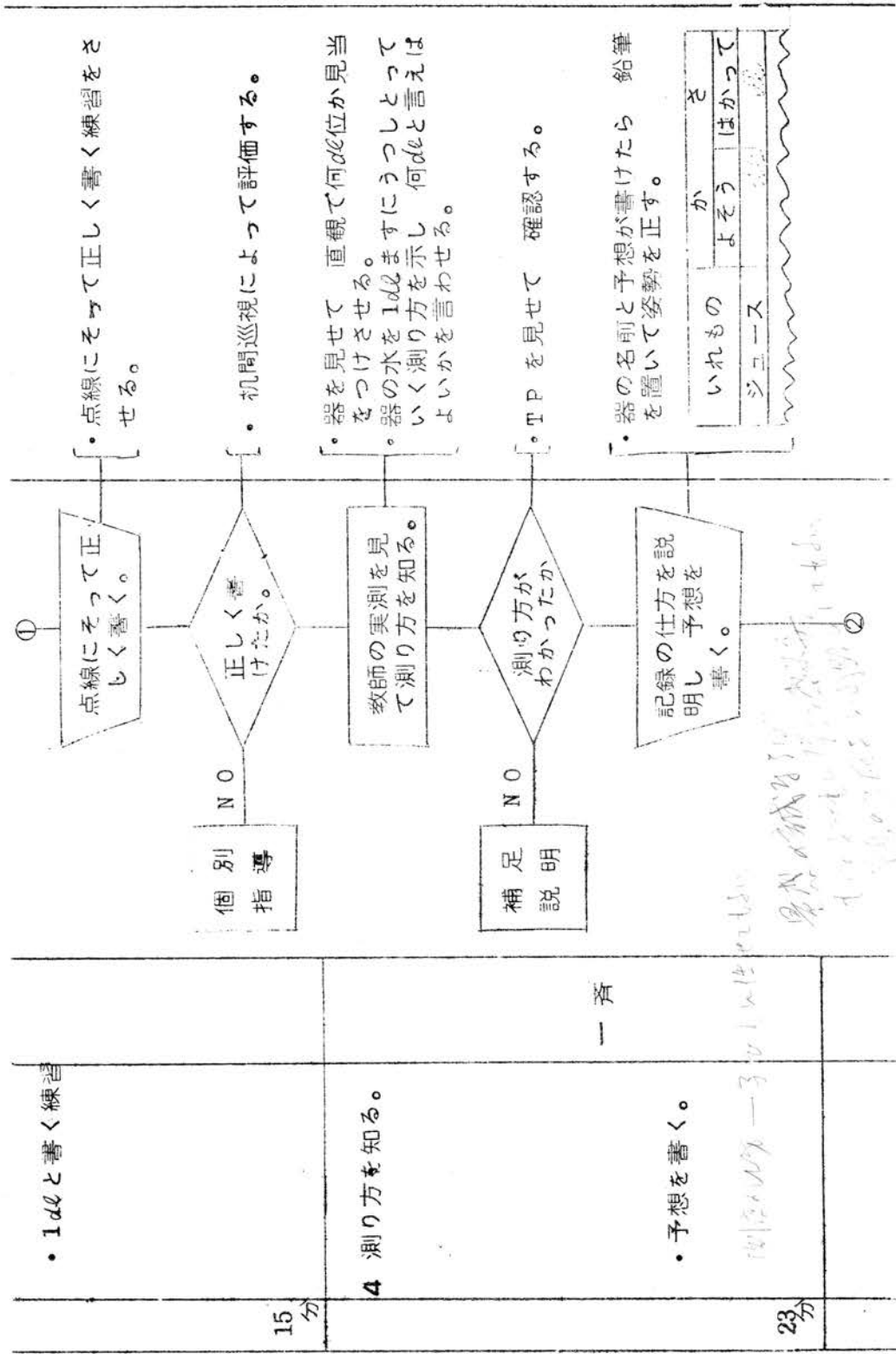
(6) コース アウトライン

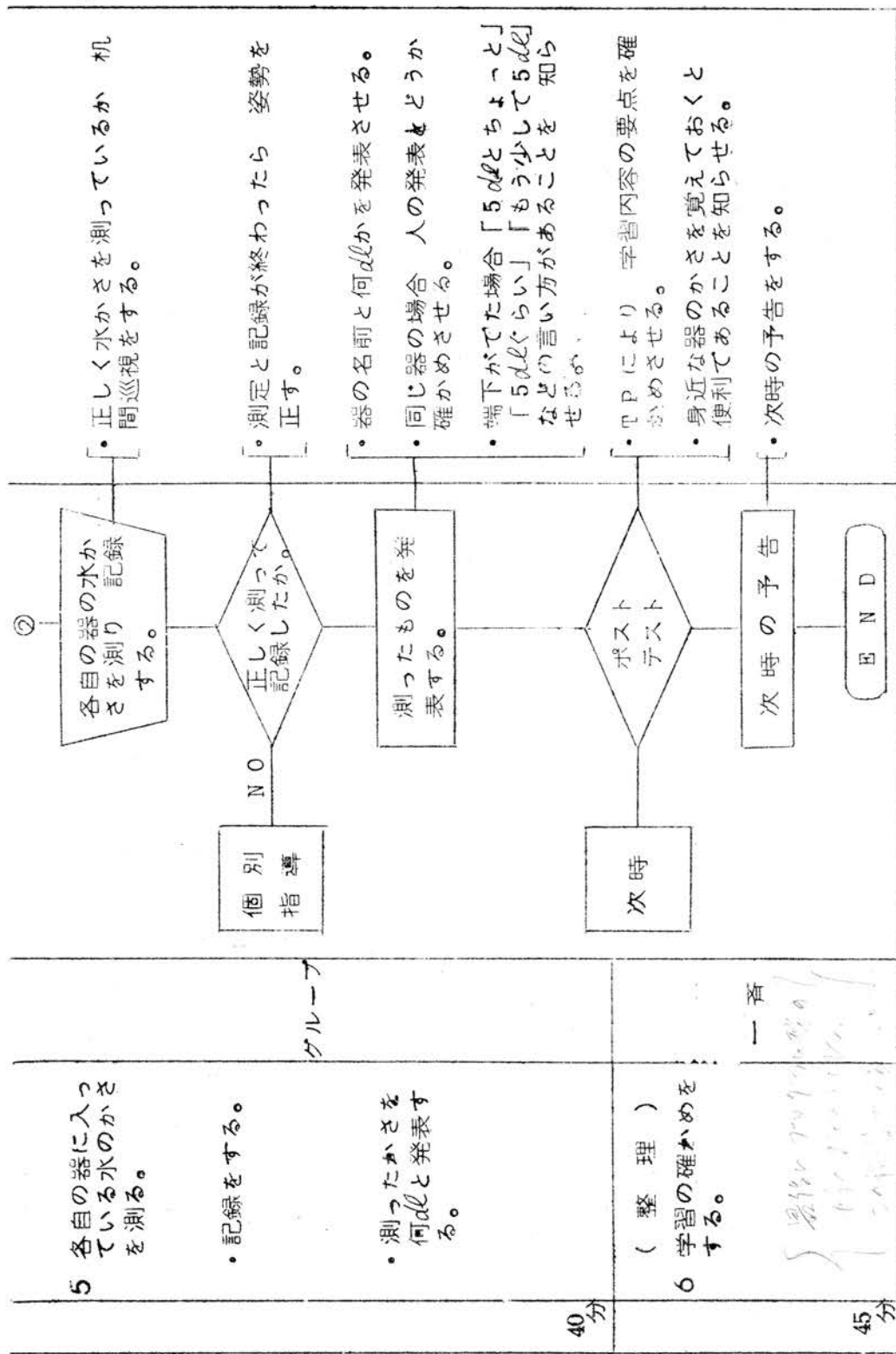


(7) 準備物

教 dlます やかん 牛乳びん コップ ジュースびんなど
水を入れたバケツ dlの練習用紙 記録用紙 小黒板
OHP TP
児 水をいっぱい入れたいろいろな容器 ぞうきん

時間	学習内容	学習形態	指導過程 (フローチャート)	教材・教具・留意点
	<p>(導入)</p> <p>1 水のかさを比べた経験を話し合おう。</p> <p>• どちらが多いか</p>	<p>一斉</p>	<p>START</p> <p>レディネステスト</p> <p>補足説明</p> <p>NO</p> <p>どんな場合でもコップで測ればよいか話し合おう。</p>	<p>• 教科書 P14 の絵を見ながら今までの経験を発表させる。</p> <p>• 絵を見て発表できるか。</p>
5分	<p>2 水のかさを測るにはどんな場合でもコップで測ればよいか。</p>	<p>一斉</p>	<p>• T.P. で量の異なるコップを示し大きさがまちまちで何はい分と違って測るから話し合いをすすめる。</p> <p>• 1dl ますを提示し目標を確認する。</p> <p>声に出して読む練習をする。</p> <p>書き方の説明をする。</p> <p>①</p>	<p>• T.P. で量の異なるコップを示し大きさがまちまちで何はい分と違って測るから話し合いをすすめる。</p> <p>• 1dl ますを配って見せる。</p> <p>• 1dl ますを使って各自の器の水のかさを測り記録することを知らせる。</p> <p>• 1 デシリットルと声に出して言う。</p> <p>• 1dl と書く。</p> <p>の練習用紙を配る。</p> <p>• 板書で大きくゆっくり説明する。</p>





社会科学習指導案

指導者 久保敏胤

- 1 日時 昭和53年10月20日(金) 9:40 ~ 10:25
- 2 学年 第4学年1組 男子13名 女子15名 計28名
- 3 小単元 島のくらし
- 4 単元設定の理由

- 「島のくらし」の小単元は「さまざまな土地のくらし」の大単元の中のひとつとして設定している。児童は4年生になって広島県内の各地の人々のくらしや産業はその土地の自然条件や交通の条件などによってちがうこと。また人々はその土地の自然条件を生かし生産を高めるために努力していることを郷土豊町と対比しながら学習してきた。この単元ではこのような見方をよりいっそう深めに視野を日本全体に拡大し国内の特色ある地域を選んで学習をすすめさせようとするものである。

本小単元は自然条件の中の地形的な特徴であるはなれ島を選び人々のくらしと自然条件とのかかわりを学習する内容である。

- 本学級の児童は社会科においての見学や視察することには興味を示してきた。まとめたり発表したりする段階では不慣れな面がある。また地図やグラフなどの資料の読みとりや活用の方法などについても不慣れである。更に県内の学習をしたときに郷土豊町と関係つけて考えることができにくかった。
- そこで授業の展開にあたっては種々の資料を示しその読みとり方や活用の経験を積みあげていきたい。また同

じような条件にある郷土豊町の人々の暮らしと対比させ 共通点や相違点に気づくように留意して学習を進めたい。

5 目標

- (1) 国内の各地で それぞれの地形や気候などの条件のもとに特色ある生活をしていることを理解させる。
- (2) さまざまな地形の中で 人々は その土地の特性を生かし 不利な条件を克服して 生産や生活の道を切り開いていることを理解させる。
- (3) どの土地においても 先人が努力し 現在の人々がそれらを受けついで工夫や努力を続けていることを知らせ 人間生活と自然との密接な関連について考えさせる。
- (4) 郷土豊町の生産や生活と対比して 共通点や相違点に気づかせ 郷土の今後の発展について考えさせる。
- (5) 地図やグラフなどの資料を活用して考察させる。

6 指導計画

第1次 海岸の暮らし ————— 4時限

第2次 島の暮らし ————— 5時限

(1) 島の位置や交通のようす ————— 1時限

(2) 気候と暮らし ————— 1時限

(3) 農業のようすとその問題点 ————— 1時限 (本時)

(4) 漁業のようすとその問題点 ————— 1時限

(5) まとめ ————— 1時限

7 本時の計画

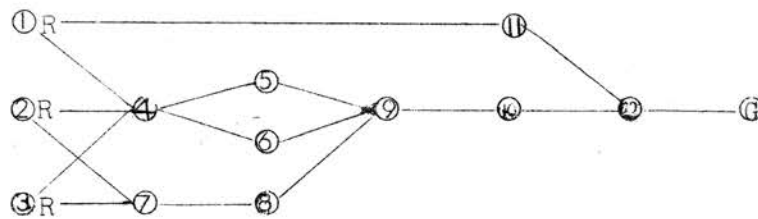
- 1) 目標 沖縄県の石垣島の農業のようすを理解させ その問題点について 郷土豊町の暮らしと対比して考えさせる。
- 2) 目標行動 石垣島では さとうきび・パイナップルの生産が中心とな

って生活を支え 野菜やくだものは買い入れている現状を
説明でき 農業の人手不足などの問題が指摘できる。

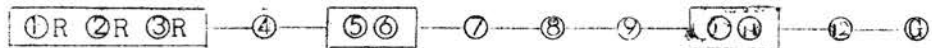
3) 下位行動目標

- ①R 1年中暑く 降水量の多い土地であることが指摘できる。
- ②R 台風が来る年と来ない年では 降水量にたいへんちがいがあること
が指摘できる。
- ③R 遠いはなれ島で 交通が不便であることが指摘できる。
- ④ 農作物はさとうきび・パイナップルが中心であることが説明できる。
- ⑤ さとうきび・パイナップルは 気候や地形に適した作物であること
がわかる。
- ⑥ さとうきび・パイナップルは 特産物として売れることがわかる。
- ⑦ 米・野菜・くだものは わずかしか作っていないことがわかる。
- ⑧ 不足するものは 沖縄や本土から買い入れていることがわかる。
- ⑨ 生活を支えているものは さとうきび・パイナップルであることが
説明できる。
- ⑩ 農業では人手不足がしんこくな問題であることがわかる。
- ⑪ 畜産業が目だってふえてきたことがわかる。
- ⑫ 農業だけでは生活が苦しくなっていることが説明できる。

4) 下位目標行動の相互関係図



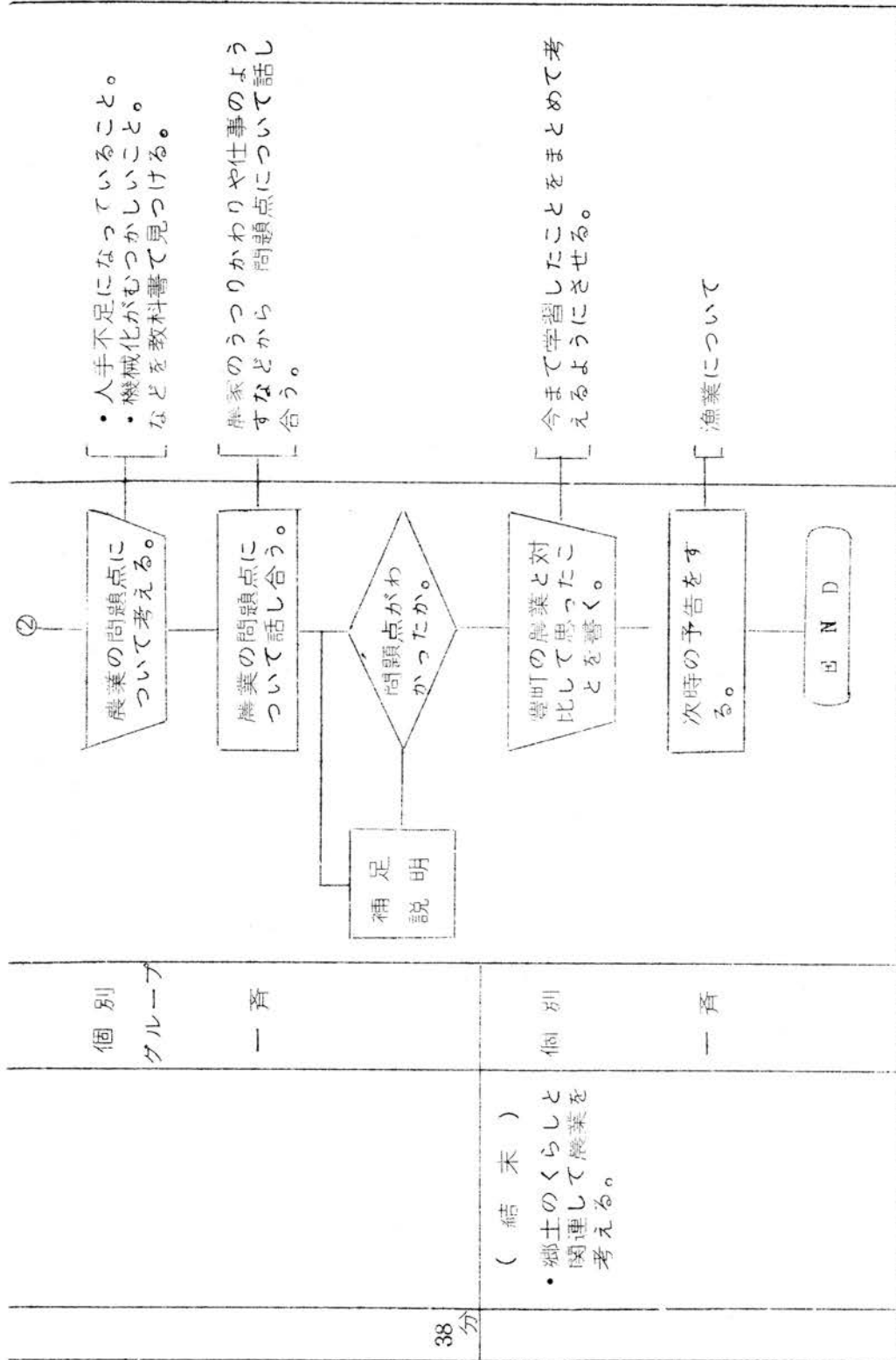
5) コース アウトライン



6) 教授・学習過程 (プロセス フローチャート)

時間	学習内容	学習形態	指導過程(フローチャート)	教材・教具・留意点
3分	(導入) ・石垣島の自然状態について想起する。 ・石垣島の農業の学習を確認する。	一斉	START 石垣島の気候・地形を思い出す。 資料(1)を示しよくとれるしよくとれないものかよれないものを見つけたら。	① 1年中暑く 降水量が多い。 ② 台風によつて降水量が違ふ。 ③ はなれ島で交通の便が悪い。
8分	(展開) ・農作物はさとうきび・パイナップルが中心であること。 ・米・野菜・くだものはわづかしないこと。	一斉	グラフ① 農産物の作付面積と生産高 選択群 ① さとうきび・パイナップル ② さつまいも ③ 米・野菜・くだもの ④ わからない スライド① さとうきび・パイナップルのようすを見る。	

<p>個別グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気候や地形のようすからパイプルの生産を支えるものがないか、パイプルの生産に支障をきたしているか、パイプルの生産に支障をきたしているか、パイプルの生産に支障をきたしているか。 	<p>① さとうきび・パイプルの中心になったわけを考える。</p> <p>さとうきび・パイプルの中心の農家のくらしについて話し合う。</p> <p>のようすがわかったか。</p> <p>補足説明</p> <p>② 農家のうつりかわりを見つける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・暑い気候に適している。 ・台風やかんばつに強い。 ・山地や台地でも育つ。 ・特産物として売れる。 ・などを資料で見つける。 <ul style="list-style-type: none"> ・収入の中心はさとうきび・パイプルの中心であること。 ・不足するものは沖繩や本土から買っていること。 ・豊町とにいて話合おう。 <p>グラフ② 農家の生産表① 農家のうつりかわり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家がへつっていること。 ・兼業農家がふえていること。 ・蓄産がふえていること。 <p>グラフの見方を学習する。</p>
<p>23分</p>		



社会科学習指導案

指導者 土井紀美子

- 1 日時 昭和53年10月20日(金) 10:45 ~ 11:30
- 2 学年 第6学年2組 男子12名 女子12名 計24名
- 3 小单元 武士の世の中〔2〕
- 4 单元設定の理由

「武士の世の中〔2〕」という本小单元は、第2单元「日本のあゆみ」の第4小单元である。

本小单元は、指導要領の内容(2)のエ・オを受けて構成されている。この小单元では、信長・秀吉に代表される兵農分離や、城下町づくりが全国統一を達成させ、鎖国・身分制度などの江戸幕府の政治が、それをより確かなものとして江戸時代封建社会を完成させてきたことに気づかせるものである。

本学級児のほとんどが、今日の暮らしが歴史的に形成されてきたものだという観念よりも、遠い昔のできごととしてとらえており、盛んな知識欲をもっている子でさえも、参考図書類に書かれていることを、ただオーム返しに答えるだけである。しかし、歴史を通して子供達に自分としての意見をもたせ、人間のあり方、自分の生き方、現実の世の中のあり方を深く考察していくように導くべきだと思う。

そこで、授業の展開にあたっては、実感を伴う理解を導きやすい資料を選択して、イメージを具体的に描かせ、その当時の社会事象をとらえさせるように努めている。尚、今後は子供達自らを歴史の中に投入させて、願い、悩み、喜びなどを感じとらせ、それと対話をさせるように導きたい。

5 目 標 安土桃山から江戸にかけての主なできごとをもとにしながら
天下が統一され 検地 刀狩り 身分制度など武士中心の幕
藩体制が整えられていく過程を考察し 当時の人々の生活や
文化の様子を理解させる。

6 指導計画 武士の世の中(2) ----- 全16時限

第1次 天下の統一 ----- 2時限

第2次 江戸幕府の政治 ----- 7時限 (本時³/₇)

第3次 産業と文化 ----- 3時限

第4次 幕府政治のおこり ----- 4時限

7 本時の計画

1) 主 題 農民のくらし

2) 目 標 「慶安の御触書」「家康のことは」「五公五民のからくり」
「五人組」の制度を学ぶ中で 農民が苦しい生活を強い
られたことを理解させ その背景を追求できる。

3) 目標行動 きびしい年貢のとりたてやとりしまりによって 農民は苦
しい生活を強いられたことを指摘でき その背景をも説明
できる。

4) 下位目標行動

① 江戸時代に大長の農民は 朝食はどろどろのそばがゆをすすり 夕
寝をしていたことを説明できる。

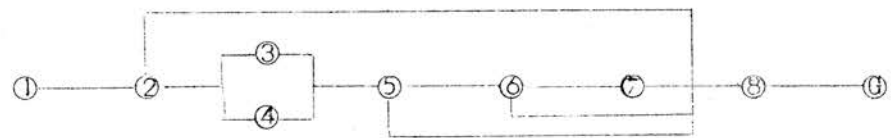
② 「慶安の御触書」の内容を知る。

③ 農民は衣食住など その日のくらしまで制限されていたことが い
える。

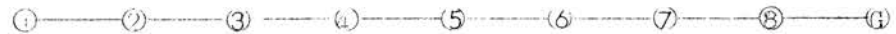
④ 武士は 農民に最低の生活をさせて 生産の増強をはからせ 年貢
を多くとろうとしたことがいえる。

- ⑤ 「百姓は、生かさぬように 殺さぬように」という言葉から 幕府は農民を年貢を納める道具として見ていたことを指摘できる。
- ⑥ 農民は年貢米を 八公二民の比率でとりたてられていたことをいえる。
- ⑦ 五人組のしくみによって 年貢をおこたったり 罪を犯す者がでないようにしたことを指摘できる。
- ⑧ 幕府が農民に対して重い年貢や厳しいきまりをつくったのは 幕府藩の財政 武士の生活費を農民の年貢によってまかなう為であり このことは 農民の力をおさえることになったことを説明できる。

5) 下位目標行動の相互関係図

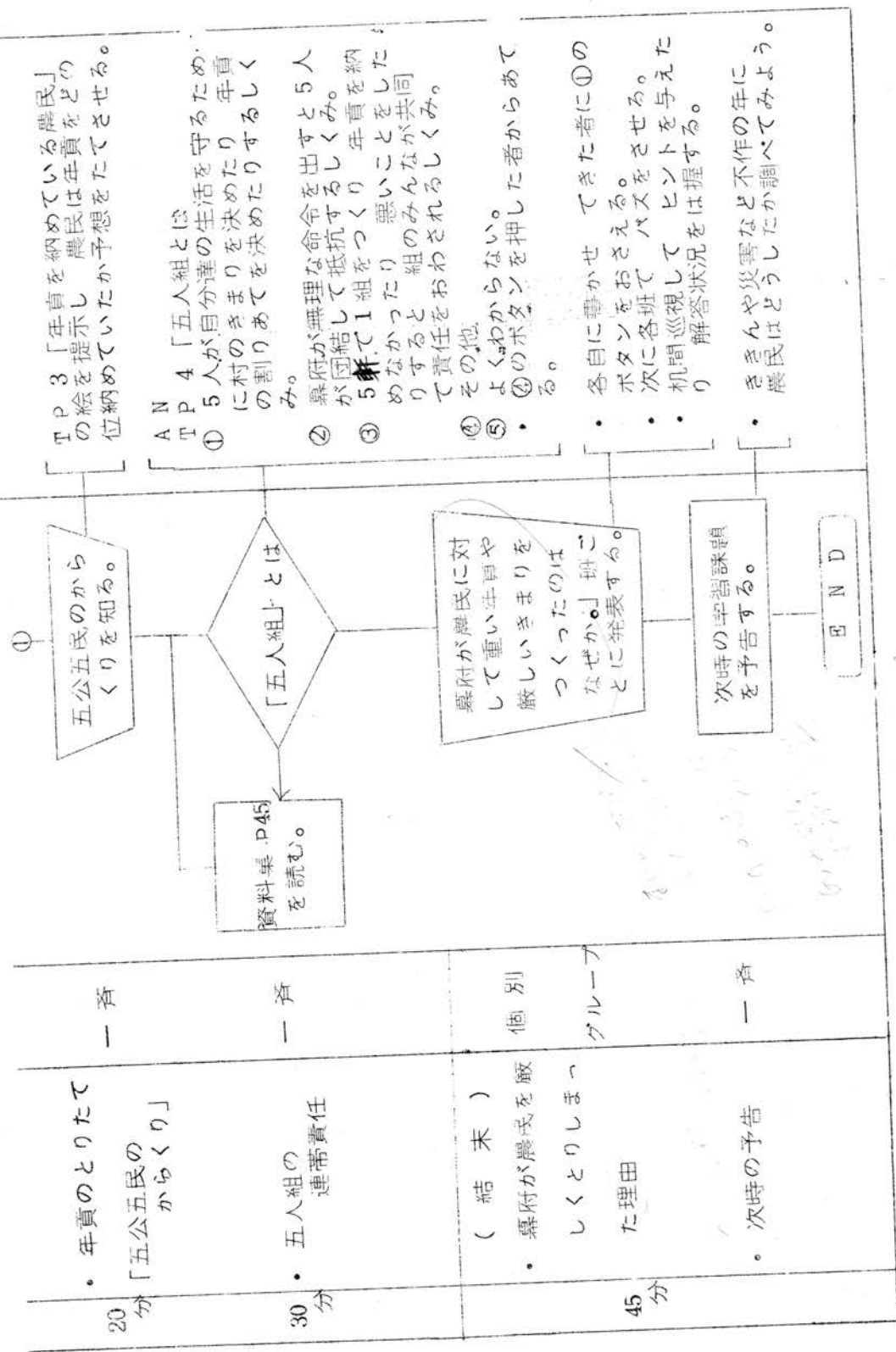


6) コース アウトライン



7) 教授 学習過程 (プロセス フロワーチャート)

時間	学習内容	学習形態	指導過程 (フローチャート)	教材・教具・留意点
3分	(導入) ・ 江戸時代の大名の農民のくらし	一斉	<p>START</p> <p>江戸時代の大名の農民のくらしについて話し合う。</p>	<p>前もって「黄金の島」を読ませておき記憶していることを発表させる。</p>
15分	(展開) ・ 農民の心得 「慶安の御触書」		<p>「慶安の御触書」を読み感想を発表する。</p>	<p>TP 1 「慶安の御触書」武士の立場と農民の立場になって感想を出し合う。</p>
20分	・ 為政者の農民観	一斉	<p>「黄金の島」P52を読む</p> <p>「百姓をかさねように殺さねように」に比べて</p> <p>YES</p> <p>NO</p>	<p>AN TP 2 「百姓をかさねように殺さねように」ということは百姓は生きていてもあまり役にたたないのて 武士に絶対服従せよ。 牛真を沢山納めるために 百姓はせいたくな生活をせずに 力一杯働け。 ① 農地の狭い日本なので 藩政で暮らすまで食糧不足。 ② その他 ③ よくわからない。 ④ ⑤ ④のボタンを押しした児童の疑問を学習の中心にしたい。 ⑥ 次の⑦の解答者に どの資料によりより②を押ししたか答えさせる。</p>



T P 3 「年貢を納めている農民」の絵を提示し 農民は年貢をどの位納めていたか予想をたてさせる。

A N 4 「五人組とは」
T P 5 人が自分達の生活を守るために村のきまりを決めたり年貢の割りあてを決めたりするしくみ。

② 幕府が無理な命令を出すと5人が団結して抵抗するしくみ。
③ 5軒で1組をつくり年貢を納めなかつたり悪いことをしたとすると組のみんが共同して責任をおわされるしくみ。

④ その他。
⑤ よくわからない。
④のボタンを押しした者からあてる。

• 各自に書かせ てきた者に①のボタンをおさええる。
• 次に各班で パズをさせる。
• 机間巡視して ヒントを与えたり 解答状況をは握する。

• ききんや災害など不作の年に農民はどうか調べてみよう。

20分	年貢のとりたて「五公五民のからくり」	一斉	① 五公五民のからくりを知る。
30分	五人組の連帯責任	一斉	「五人組」とは
45分	(結末) 幕府が農民を厳しくとりしまった理由	個別グループ	幕府が農民に対して重い年貢や厳しいきまりをつくったのはなぜか。班ごとに発表する。
	次時の予告	一斉	次時の学習課題を予告する。
			E N D